尼の像

尼の像

丹羽文

新潮社

© Fumio Niwa 1973, Printed in Japan

尼の像

昭和四十八年七月十日　印刷
昭和四十八年七月十五日　発行

定価　七〇〇円

著者　丹羽文雄
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京03二六〇一一一一
振替東京八〇八番

落丁・乱丁本はお取替えいたします

印刷・二光印刷株式会社　製本・大口製本

短篇集　尼の像　目次

熊狩り　7
尼の像　29
お遍路　55
郡上八幡　73
講演旅行　89

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

枯葉 105
訪問客 123
泥（ぬかるみ）濘 145
カナリヤ 183
ひとごと 207

装画

川島　猛

短篇集　尼の像

熊狩り

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

今年は例年になくはやばやと熊が人里ちかくにあらわれた。去年は熊のあたり年であった。この調子でいけば、今年も熊の豊猟になりそうである。先日も一頭本郷村でしとめられたが、民家から百メートルとはなれないリンゴの木にのぼって、リンゴをかじっていたところを猟友会員に撃たれた。中信地方では、これで八頭目という。県の林務部の報告によると、射殺頭数はすでに一一頭になった。

去年県下でしとめられた月の輪熊は、三三六頭であったが、その前年にくらべると倍の捕獲量であった。大町、北安曇（あずみ）地方で六六頭、南安曇地方で四九頭、長野市周辺でも一六頭であった。

「近い将来、熊の保護区を設定しなければ、いまに県下から熊が一頭もいなくなる。これもまた自然破壊だ」

という声があった。

月別にすると、十月が熊のあばれ月とされている。十月に一〇二頭、九月に七五頭、八月に三〇頭である。全滅という自然破壊の心配はあるが、長野県下には捕獲数の四、五倍の熊がい

るといわれている。

「決してそれだけ熊が多くなったわけではないのです。人間が熊の領分を犯すからですよ」

と、林務部は語る。人間がつぎつぎに山の木を切り倒し、熊の好きなウド、クリ、アケビ、ヤマブドウ、クルミなどを横取りする。その上林道や観光道路で追いたてられ、自動車の音に脅かされ、熊としてもおちおちしてはいられない。やむなく人里近くに出没して、リンゴ、モモ、トウモロコシを食べる。最近の熊はキャンプ地にもあらわれて、文明食の味をおぼえた。去年の熊の胃袋から、お茶がら、ソーセージ、ビニールが出た。

去年は軽井沢のはなれ山に熊があらわれた。月の輪熊は人間を喰わない。が、その一撃で人間の顔が潰されてしまう。北海道のひぐまは、人間を喰らう。人間はひぐまの餌であった。熊に遭ったら、死んだふりをすればのがれられるといい伝えられているが、熊のあらい鼻息をふっかけられても、なお死んだ真似がしていられるのは、よほどきものすわったひとである。北海道のあるゴルフ・クラブでは、一日三十人の客があれば経営がなりたつところがある。閑散としたゴルフ場である。

「五日前、バンカーに熊の足跡を発見して、キャディが青くなって逃げました」

熊は自分の足跡を目じるしに、必ずその道をとおって戻るといわれている。バンカーに足跡があれば、いつか必ず熊はそこを通ってかえってくる。コースのところどころに大きな樹の切り株が放置されている。切り株は黒く変色している。遠くからみると、いかにも熊がうずくまっているようにみえる。白い球がとおくにとんだのに気をよくして近付いていくと、大きな切り株がぐらりと動いて、仁王立ちしないともかぎらなかった。

健と康一は、おじいさんから熊の話を聞くのが好きであった。
「おじいちゃん、そのゴルフ場で熊に会わなかったの？」
「幸い熊には出会わなかったよ。しかし、熊によく似た切り株には何度もひやひやさせられた」
「熊に出会わなかったのは、残念だったね」
健がいかにも残念そうにいった。小学校の三年生である。康一は今年から小学校に通っている。

二階で書きものをしていたおじいさんが、庭にあらわれた。ナラやシイの大木、楓、赤松、落葉松の樹立の中には、ひやりとした空気がよどんでいた。おじいさんは苔を軽くふんで歩きはじめた。さまざまなきのこが生えている。ことごとく毒きのこである。孫たちがもっと幼いころ、手をひいて苔の上を歩き、毒きのこを踏みつけることを教えた。絵に描いたようにきれいなきのこである。幼い目には、手にとりたいものである。毒であることを教えたところでのみこむ年齢でないので、足で踏みつけることを教えた。きのこをみると、よたよたと近付いて踏みつける習慣がついた。おじいさんは、真白なきのこを踏みつぶした。一夜にして苔をもち上げ、大きなかさをひろげていた。踏みつぶすには惜しいほどの自然の驚異であった。おじいさんは、そのとき孫の声のしないのに気がついた。おじいさんは耳をすませて、あたりをうかがった。おばあさんが露台の椅子で雑誌をひろげていた。健の母親が洗濯していた。背の高い康一の母親が部屋の中でうごいているのがながめられた。あたりがしいんとしている。子供のいない家庭のような音のなさであった。何か異様であった。静かすぎる。

「健、康一」
と、呼んだ。返事はなかった。家の中か、家のまわりであそんでいるなら、子供たちの雰囲気はそれと感じられるものである。
「健、康一」
おじいさんの呼び声が次第に異様になっていくのに、家人は気がついた。おばあさんが表にあらわれた。
「どうしたんですか」
「健と康一はどこにいるのか。返事がない」
「そういえば、さっきから見かけませんが」
「さっきからって、いつからか」
「いつからって……」と、おばあさんは当惑した。三十分前がさっきなら、一時間前もさっきであった。「そういえば、もう大分前から、子供の声をきいてません」
「どこへいったのか」
そこへ健の母親が手をふきふきあらわれた。
「健はどこへいったか。呼んでも、いないのだ」
「健たち熊狩りにいくといって出かけたわ」
「いつ」
「いつって……。お昼がすんで間もなくだったわ」
「いまなん時か」

「五時前です」と、おばあさんが答えた。
「お昼に出かけたとすれば、すでに五時間近く経っている。熊狩りに出かけた？　九つと七つの子供が熊狩りに出かけたのか。子供だけで出かけたのか。それにしても時間がかかりすぎる。どこの方向に出かけたのか」
「熊狩りにいくというので、いいわっていったんだけど」健の母親がにわかに不安な眼差になった。「それにしても時間が……？」
　五時間近くもすがたもみせず、声もしない。というのは、ただごとでなかった。いままで一度も自分らだけで遠出をしたことのない子供であった。ここは隣家といったところで、それぞれ百メートルもはなれていた。林の中に別荘が点在した。林の静けさが、いつもの静けさとちがっていた。
「康一いません。どこへいったのですか」
　ドイツ人系の母親が、尻上りな発音で三人のところに寄ってきた。七歳の子供があるが、このドイツ人にはまだ日本語の発音におかしなところがあった。
「健も康一もいないんだ。熊狩りに出かけたというが、山の中で迷っているのではないか。かえるにかえれなくなっているのではないか。五時間も経つのに戻って来ないというのは、ただごとではない」
「熊狩り？　ほんとですか」
「熊の出そうなところを歩きまわっている間に、道にまよってしまったのではないか」
「ほんとに熊いますか」

「今年も熊のあたり年になると予想されている。食べものがなくなったので、人里近くに出没しているのだ。アケビやクルミやヤマブドウのなるところを熊は知っている。たとえその近くに観光道路がしかれて、車が走っていようと、熊は食べにくるからね」

家族の表情が固くなった。子供の熊狩りだが、ほんとうに熊に出会わないとも限らなかった。おばあさんは最悪の場合を想像して、胸さわぎをおぼえた。灌木や草を分けて、めくらめっぽうに歩いている間に、谷に落ちこむということもありうる。道はないのだ。幼い子供には方向がわからない。すでに樹で影は暗くなりかけている時間であった。

「私がそこらを見て来ます」

庭の手入れにきていた土地の植木屋が自転車にのって、出ていった。

「熊狩りというので、いつものあそびだと思って、いってらっしゃいといったんだけど、ほんとうに熊狩りに出かけたのかしら。信じられないわ」

健の母親が泣き出しそうな顔をしておじいさんにいった。

「子供のすることだ。何をするかわからない。みんなでさがすのだ」

お手伝いさんもだまっていることが出来ず、さがしに別荘を出ていった。隣家は健の母親のとつぎ先の別荘であり、そこの運転手がいた。運転手もさがしに出かけることになった。健の母親と康一の母親も自転車にのった。おじいさんとおばあさんは不安で胸をしめつけられ、むなしく庭に佇んでいた。刻々不安が現実的になってくる。

「山の中で迷っているんじゃないでしょうか」

「もう半時間も経てば、林の中は暗くなる。夜が来る。大へんなことになる。山の中をさまよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com